

機関名	東京大学	機関番号	12601	拠点番号	D02
1. 機関の代表者 (学長)	((ふりがな<ローマ字>)>HAMADA JUNICHI (氏名)濱田 純一				
2. 申請分野 (該当するものに〇印)	A<生命科学> B<化学、材料科学> C<情報、電気、電子> D<人文科学> E<学際、複合、新領域>				
3. 拠点のプログラム名称 (英訳名)	死生学の展開と組織化 Development and Systematization of Death and Life Studies				
研究分野及びキーワード	<研究分野: 哲学>(哲学原論・各論)(倫理学原論・各論)(宗教学)(歴史)(社会)				
4. 専攻等名	大学院人文社会系研究科 基礎文化研究専攻、社会文化研究専攻、アジア文化研究専攻、附属死生学・応用倫理センター				
5. 連携先機関名 (他の大学等と連携した取組の場合)					
6. 事業推進担当者	計 14 名 ※他の大学等と連携した取組の場合: 拠点となる大学に所属する事業推進担当者の割合 [%]				
ふりがな<ローマ字> 氏名(年齢)	所属部局(専攻等)・職名	現在の専門 学位	役割分担 (事業実施期間中の拠点形成計画における分担事項)		
(拠点リーダー) ICHINOSE Masaki 一ノ瀬正樹(54歳)	大学院人文社会系研究科 基礎文化研究専攻・教授	哲学 博士(文学)	拠点形成計画の総括、人文学の現代的実践現場への関与		
SHIMAZONO Susumu 島 蘭進(63歳)	大学院人文社会系研究科 基礎文化研究専攻・教授	宗教学 文学修士	死生の倫理や実践に関わる理論的考察、事務局担当		
KOJIMA Tsurushi 小島毅(47歳)	大学院人文社会系研究科 アジア文化研究専攻・准教授	中国思想 修士(文学)	死生の文化の比較研究、国際会議担当 (平成23年4月1日追加)		
SHIMODA Masahiro 下田正弘(54歳)	大学院人文社会系研究科 アジア文化研究専攻・教授	インド哲学 博士(文学)	死生の文化の比較研究、若手支援および人材養成担当		
ANDO Hiroshi 安藤宏(53歳)	大学院人文社会系研究科 日本文化研究専攻・教授	国文学 文学修士	死生の文化の比較研究、点検評価担当		
OHOTOSHI Tetsuya 大稔哲也(51歳)	大学院人文社会系研究科 アジア文化研究専攻・准教授	東洋史 博士(文学)	死生の文化の比較研究、国際会議担当		
AKIYAMA Akira 秋山聰(49歳)	大学院人文社会系研究科 基礎文化研究専攻・教授	美術史・哲学 博士(PhD)	死生の倫理や実践に関わる理論的考察、国際会議担当		
KUMANO Sumihiko 熊野純彦(53歳)	大学院人文社会系研究科 基礎文化研究専攻・教授	倫理学 文学修士	死生の倫理や実践に関わる理論的考察、会計担当		
IKEZAWA Masaru 池澤優(54歳)	大学院人文社会系研究科 基礎文化研究専攻・教授	宗教学・哲学 博士(PhD)	死生の倫理や実践に関わる理論的考察、会計担当		
SUZUKI Izumi 鈴木泉(49歳)	大学院人文社会系研究科 基礎文化研究専攻・准教授	哲学 文学修士	死生や倫理の実践に関わる理論的考察、若手支援および人材養成担当		
NAKAGAWA Keiichi 中川恵一(52歳)	大学院医学系研究科 生体物理医学専攻・准教授	医学 医学博士	医療現場から見た死生学、緩和ケア担当		
SHIMIZU Tetsuro 清水哲郎(65歳)	大学院人文社会系研究科附属 死生学・応用倫理センター・特任教授	死生学 文学博士	人文学の現代的実践現場への関与、医療現場から見た死生学(平成19年6月27日追加)		
AKAGAWA Mamabu 赤川学(44歳)	大学院人文社会系研究科 社会文化研究専攻・准教授	社会学 博士(社会学)	人文学の現代的実践現場への関与、若手支援および人材養成担当(平成22年4月1日追加)		
KAMIBEPPU Kiyoko 上別府圭子(57歳)	大学院医学系研究科 健康科学・看護学専攻・准教授	博士(保健学)	医療現場から見た死生学、家族ケアの死生学担当(平成21年9月1日追加)		
TAKAHASHI Miyako 高橋都(50歳)	大学院医学系研究科 公共健康医学専攻・講師	医学 博士(保健学)	医療現場から見た死生学、ジェロントロジー(老年学)との連携担当(平成21年7月31日辞退)		
TAKEUCHI Seiichi 竹内整一(63歳)	大学院人文社会系研究科 基礎文化研究専攻・教授	倫理学 文学修士	人文学の現代的実践現場への関与、応用倫理教育プログラムとの連携担当(平成22年3月31日辞退)		
YAMAZAKI Hiroshi 山崎浩司(40歳)	大学院人文社会系研究科附属 死生学・応用倫理センター・特任講師	死生学 博士(人間環境学)	人文学の現代的実践現場への関与、医療現場から見た死生学(平成19年6月27日追加、平成22年9月30日辞退)		
SATO H Kenji 佐藤健二(54歳)	大学院人文社会系研究科 社会文化研究専攻・教授	社会学 博士(社会学)	人文学の現代的実践現場への関与、事務局担当 (平成23年3月31日辞退)		

機関（連携先機関）名	東京大学
拠点のプログラム名称	死生学の展開と組織化
中核となる専攻等名	大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻
事業推進担当者	（拠点リーダー） 一ノ瀬正樹 教授 外 13 名
<p>〔拠点形成の目的〕</p> <p>本研究拠点は、古今東西の死生観の比較研究や死生の価値についての理論的研究を踏まえつつ、現代社会の死生の現場、ケアや臨床の現場に生起する諸問題に応答することを通して、他に類例を見ない死生の学知にかんする世界最高水準の研究教育拠点の形成を目指す。まず、世界の諸文明において、死生の知や実践がどのような形をとっていたかについて、生命科学などの自然科学との連携のもと、人文学の伝統を踏まえた考察を進める。また、応用倫理、とりわけ生命倫理の諸問題は死生学と深く関わり合う。人間の尊厳、（人間以外の生物も含めた）いのちの尊さ、死とは何か、死刑は正義か、死生に関わる問題についていかに意思決定をすべきかなどの諸問題に理論的考察を加え、生命倫理をはじめとする応用倫理・道徳哲学が直面する諸問題に死生学の立場から寄与することを目指す。そして「死にゆく人びとに対するケアのあり方」をはじめとし、医療現場でのケアの実践や臨床的な知の諸問題に答えていく。さらに、死と生とは不可分のものであるとの基本的認識に基づき、ケアや養育の現場で求められる知の学問的基礎づけを行う。このように広く死生をめぐる諸問題に応じようとする学は、死にゆく人びとの周辺の課題のみを取り上げてきた従来の死生学（Death Studies）の限界を超え、死生の現場・いのちの危機の現場を広く取り巻く問題状況全体を見渡しつつ、人文社会系の諸学の成果を総合した、学際的な知を展開・組織化していくことを可能にする。</p> <p>〔拠点形成計画及び達成状況の概要〕</p> <p>21世紀COEプログラム「生命の文化・価値をめぐる死生学の構築」（略称「死生学の構築」）によってなされた死生学の基礎構築を踏まえ、死生学研究の展開を進めるとともに、自立した学として、また人材育成システムとしての組織化を推進する。以下の3つの分野において、死生学の展開を推し進め、世界的な水準の研究拠点としての内実を整える。</p> <p>（1）死生の文化の比較研究——世界の諸地域の古今の死生観を表す思想・文芸、形象文化等の研究、死や生殖・誕生、死生の循環をめぐる儀礼や習俗等の研究、死者の記憶や追悼に関する研究を進める。（2）死生の倫理や実践に関わる理論的哲学的考察——現在の欧米の死生学や生命倫理学をはじめとする実践哲学の達成を踏まえ、日本の状況を踏まえた独自の考察や伝統に立脚したケア実践や倫理の理論を構築する。（3）人文学の現代的実践現場への関与——人文学の伝統を踏まえつつ、現代的な実践現場に関与していく臨床的な知の形成のための方法論的省察を深め、それを実践に展開していく。以上のような学問的内実を達成しつつ、あらたに日本から発信する死生学として、独自の貢献を明確にしていく。また、①大学院やPDの段階での死生学教育を強化し、関連諸分野の若手研究者が死生学の分野で十分な実力を発揮する体制を築くとともに、②医療やケアの現場で実践にたずさわる人々が、死生学の専門的知識を身につける体制の組織化を進める。こうした展望の下に以下の諸課題を追求し、具体的成果を達成した。</p> <p>(i) 死生学の諸領域における知の組織化——21世紀COEにおいて構築した死生学の基礎を踏まえ、死生学の学的体系化・組織化を推し進めた。内外の最先端の研究者を招聘して死生学の理論的深化を進め、その成果の刊行を行った。生命倫理等、応用倫理の諸問題を、人類史を見渡した広大な知的視野のもとに捉え直していく学として本拠点の死生学は構想されている。古今東西の死生の文化についての研究の分厚い蓄積を土台として、欧米やアジア、とりわけ中国や韓国、さらにイスラーム圏を含めアジア諸国の研究者との交流を通じて多面的な比較研究を行い、世界最高水準の死生学の組織化を進めた。</p> <p>(ii) 多分野の研究者やケアの現場に関わる人々との知的交流——人文社会系の諸学のみならず、医学、生命科学、教育、法学等、死生の知に関わる多様な分野の研究者との知的交流を進めた。とりわけ医療やケアの現場との連携を深めることによって、人文学を基礎としつつも生活の現場に近い学知としての死生学の組織化を進めた。そのために、ケアの現場や死生に関わる意思決定の現場で実践的な問題に取り組む専門家へのリカレント教育や市民との知的交流を進めた。</p> <p>(iii) 大学院生や若手研究者による次世代の死生学の基盤形成——大学院生やPDレベルの若手研究者による研究活動を推し進め、伝統的な死生の知がますます機能を失うであろう未来と、高齢化社会の到来による死生観の変動のかなたを見すえた新たな死生学の基盤の形成に努めている。多様な分野の若手研究者が恒常的に刺激しあうような研究教育環境を作り出すとともに、彼らが国際的な研究交流に頻繁に参加できる研究環境を一定程度構築した。英語による発信力を養成するとともに、他の諸外国語に通じた死生学の研究者が輩出すべき人材養成を達成できた。</p>	

6-1. 国際的に卓越した拠点形成としての成果

国際的に卓越した教育研究拠点の形成という観点に照らしてアピールできる成果について具体的かつ明確、簡潔に記入してください。

何度か本報告書でも記してきたことだが、「死生学」を”Death and Life Studies”と表記することからして、そもそも本プロジェクトの新鮮さがある。一般に、この研究領域は、米国では”Thanatology”, 英国では”Death Studies”と呼ばれており、”Death and Life Studies”という呼称はきわめてユニークである。しかも、これは単に名前だけの問題にとどまらない。”Life”を加えることによって、われわれの死生学プロジェクトは、一般に「死生学」という表記によって表象されがちな、生命倫理、医療倫理、葬送儀礼研究、デス・エデュケーションといった領域にとどまらない（もちろんそうした基本領域を押さえた上でのことであることは言うまでもないが）、豊かな射程を含意することができた。しかも、そのことを、多くの海外研究者を招きながら、国際シンポジウムや国際ワークショップを開催することによって、海外に発信する活動を着実に積み重ねてきたのである。

一つには、生命科学との連携という側面が重要な要素として挙げられる。もともと「死生学」という観念には、「死」についての生命科学研究が包含されてはいたが、本死生学プロジェクトは、それを大胆に拡張し、進化理論、脳科学、分子生物学などと結びながら、文理融合的な接近法を確立することができた。生命科学が”Life Science”である限り、”Life Studies”を謳う本プロジェクトと連携することは理の当然である。このことは、テーマとしては、戦争、自由、自殺、がん、といった問題系のなかで像を結んだ。戦争や自由や自殺は、進化理論的にどう理解されるか、脳科学や分子生物学的にどう分析されるか、そうした知見を、優性思想への傾きとかパラダイム論とか、また哲学的な因果論とかの人文的問題意識と突き合わせることで、想定外の有意義な成果が現れることが検証されたのである。たとえば、こうした路線の中で、拠点リーダーの一ノ瀬は、英国オックスフォード大学での国際研究会議にて、「触法精神障害者の刑事責任」という問題を取り上げ、骨相学などの生命科学史的話題と折り合わせながら、一定の視点を提示した。死生学プロジェクトを引き継ぐ「死生学・応用倫理センター」においても、人文的アプローチを基盤としつつも、生命科学との密接な連携を図る、というこれまで培ってきた成果が継続的に機能するはずである。

さらに、”Life Studies”を組み込むことによって本死生学プロジェクトが達成した、もう一つのユニークな成果は、医療倫理や生命倫理の問題圏に、「どう生きていくべきか」という、「生」に焦点を当てた問いを根幹的問いとして位置づけ、しかもそれを、死者を想いながら生きていく、という私たちの生活様式の問いへと昇華させることで、広い視野からの探究を可能なら占める基盤を形成した、ということが挙げられるだろう。具体的には、医療従事者のケア・看護・介護に関するリカレント教育に死生学の他の領域の教育研究成果を導入することによって、グリーフケア、追悼、ひいては流産などで胎児を失った後での喪失体験の中での生など、死者に面しながらも生き抜いていく人々のありようを学問的に主題化し、全方位的な角度から検討していく道筋を確立した。こうした道筋は、明らかにいわゆる医療倫理・生命倫理を越えた、プラクティカルな重みを備えた研究方向であり、国際的に見ても大いに誇りにできる研究態勢が整えられたと考える。この態勢は、むしろ、「死生学・応用倫理センター」へと継承されていくだろう。

第三に、”Life Studies”という着想を混ぜ合わせることで、従来の、医療倫理・生命倫理あるいは死生観研究といった典型的な死生学研究からは落とされがちであった、現実社会なかで見落とされがちな、「隠蔽されがちな生」という問題系を死生学プロジェクトの主題として導入することができた。具体的には、一つには、人間以外の「動物の生」の問題がある。私たち人間は、さまざまな仕方で動物と共生したり、動物を利用しているが、これまであまり「動物の生」を倫理的な主題として論じるという動機付けが整っていなかった。しかし、20世紀後半に、倫理学の世界で動物倫理の話題が大変活発に論じられるに及んで、遅まきながらも、我が国でも徐々に動物倫理にまつわる考察が生まれてきた。本死生学プロジェクトは、そうした議論の結末点として機能し、アニマルセラピー、ペットロス、介助犬、動物実験、ヴェジタリアニズムといった話題を学問的に吟味する基盤を形成した。医療倫理を論じるという背景をもった研究プロジェクトが、同時にアニマルセラピーや動物倫理を検討するというのは、世界的にもきわめて貴重であり、国際的に十分にアピール力のある成果であると言える。また、3.11以降の原発事故絡みでも、放射能問題を素早く主題化することで、福島の前線地にとどまる人々はもちろん、原子力発電所作業員の生活といった、なかなか正面切って論じられることが多くない位相をすぐに主題化して、実際に学問的検討を行う場まで何度かもった。この側面は、まだ事故事態が完全には収束していない状況ということもあり、国際発信には至っていないが、「死生学・応用倫理センター」に引き継がれて、世界に訴えていく必要があると理解している。

「グローバルCOEプログラム」（平成19年度採択拠点）事後評価結果

機 関 名	東京大学	拠点番号	D02
申請分野	人文科学		
拠点プログラム名称	死生学の展開と組織化		
中核となる専攻等名	大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻		
事業推進担当者	(拠点リーダー名)一ノ瀬 正樹		外 13 名

◇グローバルCOEプログラム委員会における評価（公表用）

（総括評価）

設定された目的は十分達成された。

（コメント）

大学の将来構想と組織的な支援については、本拠点を大学の将来構想の実現を目指すアクションプラン推進の中核と位置付け、総長のリーダーシップの下で組織的なバックアップ体制を整え、「寄付講座」を核として、研究の推進、PDや博士課程の大学院学生など若手研究者の育成に卓越した取組がなされた。また、COEプログラム推進室などにおいて、全学的な支援がなされ、死生学の拠点大学として充分機能した。

拠点形成全体については、以下に記す各種の取組により、欧米の「知」に偏らないアジアやイスラム圏を含むグローバルな視点からの死生学の形成、国際的に活躍しうる創意に富んだ若手研究者の育成、実践現場への死生学の浸透という「国際的に卓越した教育研究拠点形成」の目的が十分に果たされている。

人材育成面については、博士号取得者は多いとは言えないが、46名の特任研究員を全国から採用し、教育研究職に32名を送り出している。リカレント教育も実施し、社会貢献でも注目に値する。

研究活動面については、欧米の死生学を考慮し、日本・アジア・イスラムの伝統を踏まえた独創性に富んだ死生学の国際的に卓越した教育研究拠点の形成に向けて着実に成果を積み重ねた。「死生学の諸領域における知の再組織化」については、『死生学』全5巻を刊行し、現段階での成果をまとめるとともに、日本語・英語の両機関誌の発行や、多数の国際シンポジウムの開催等の活動は十分に評価できる。また、特任研究員による研究会議・国際シンポジウムの企画運営を積極的に支援しており、諸外国の研究者との交流は死生学研究の将来の展開に貢献すると評価できる。更に、欧米のみならずアジアやイスラム圏の諸国との研究交流を積極的に行うとともに、死生学にlife studiesの観点を取り込むことによって、死生学の対応範囲を確実に広げている。リカレント教育の仕組みも具体的であり、評価できる。